

パネルディスカッション

防災教育と地域の連携を考える

コーディネーター：室崎 益輝 氏

(総務省消防庁消防研究センター所長、神戸大学名誉教授)

パネリスト：石井布紀子 氏 (有限会社コラボねっと)

渥美 公秀 氏 (大阪大学コミュニケーション
デザイン・センター助教授)

吉川 肇子 氏 (慶應義塾大学商学部助教授)

片山 忠治 氏 (池田市鉢塚自主防災隊中隊長)

(室崎) それでは「防災教育と地域の連携を考える」ということで、パネルディスカッションに入らせていただきたいと思います。最初にクロスロードゲームについてということで、吉川先生にお話しいただきます。

クロスロード・ゲームとは

(吉川) 今日は、私が専門としているゲーム型教材の開発ということで、幾つかご紹介をさせていただきたいと思います。

先ほども皆様にやっていただいたものですが、クロスロードをご紹介します。阪神・淡路大震災のときの神戸職員の方々の実話を基にして作ったものです。今日は3題ほどやったわけで、正解があるのかという質問もあったかと思うのですが、イエスにしてもノーにしても問題点があるようなジレンマを主に集めて問題としています。

ももとの英語のクロスロードという単語の意味は、分かれ道です。だからイエスカノーか、右か左かという、人生の岐路ということですが、実はもう一つ意味があり、人と人が出会う場所という意味もあります。つまり、今日皆様に先ほどやっていただいて、本当に見ていて感激するばかりだったのですが、このテーブルで4～5人の方々が問題や意見を共有してくださったように、問題を通して、あるいはこういうゲームを通して、人と人が出会う場所になれば幸いだと思って、このように命名しました。

今日は、神戸編を主にやっていただいたのですが、実は発表してから2年ほどたちましたので、いろいろなバージョンができています。例えば、高知県の研修ではよくお使いいただいているのですが、高知県は非常に水害の多いところですので、高知県向けに職員の方が作ってくださった問題もあります。

それから、災害時要援護者の問題は、かなり問題になるので、これも問題としてほしいという要望があり、これは呉市の社会福祉協議会のご指導を得て、呉市の研修用に作った問題もあります。

それから、もともとクロスロードは神戸編から始まったわけですが、行政職員の方の問題が多いので、もっと市民と気軽に、率直に話し合えるような問題が欲しいということで、市民編も同じように作り、京都大学生協で販売しています。たとえば、避難後に用意していた非常持ち出し袋を開けるかどうかという問題や、耐震金具は50円でつけられるのにつけないのは、お金の問題ではなく、多分格好悪いという問題がかなりあるかと思しますので、どうしますかという問題を作りました。

クロスロードの広がり

クロスロード市民編をご紹介した理由は、実はこういう問題を、私たちは中学生ぐらいからしかできないのではないかと思っていたのですが、ちょっと平仮名に書き換えて、小学生がやってくれました。けっこう好評でした。今の2問ともやっていただいたのですが、これが感想の全部です。もちろん、これは小学校の先生がやってくださったので、いろいろご指導のたまものもあると思うのですが、小学生でもやはりクロスロードは勉強になると言ってくださって、大変小学生の皆さんにも感謝している次第なのです。

正解がないというところを非常に問題にされることもあるのですが、正解はやはり皆さん自身で作っていただくのが、私たち制作者のスタンスです。クロスロードは問題提示しているのもので、ぜひ考えるツールとして使っていただくといいかと思っています。

このほかにもたくさん問題を作っていて、アジアの主にフィリピン、モンゴル、インドネシア、ベトナムの方々にも作っていただきました。

手掘りで金を掘る人たちが世界じゅうで1000万人ぐらいいるのですが、本当にhand to mouth（その日暮らし）の最たるものです。そういう人たちが金を

採集するのに、シアン化合物を使うのです。ところが、そういうものは非常に有害なのだけれども、それを禁止すると生計が成り立たないという非常にシビアな問題があります。日本のものとドイツのものは非常に質がいいので、彼らはお金がないのですが、買って使うのです。そういうものも問題として作って、こういうものをマイナー（miner、鉱山労働者）自身にも考えてもらうということでも作っています。

それから学校安全編のようなものも作っていて、教室の配置をどうするかという問題、それから最近新型インフルエンザの議論がされていると思うのですが、感染症の研修にも保健所向けに作って、これも熊本県などでお使いいただいています。

こういうゲーム型の教材を私たちは一生懸命作っているのです。ゲームという遊びのように思われてしまって、先ほどこロスロードゲームと紹介されたので、災害対策を学ぶのに遊ぶのかと思われた方も最初あったかと思うのですが、私たち自身は非常にまじめにやっているつもりです。ゲームという道具を使って問題を考えたり、それから正解を学ぶこともありますし、あるいは問題の共有や意識の共有をすることもあります。それから、今日皆様がやっていただいて、少しそのときに話し合ったりして、感情を学ぶといったこともあったのではないかと思います。

それから、これはもっと狙っていることですが、高知県の皆さんに作っていただいたり、それからアジアの人たちに作っていただいたり、それから小学生にも実は頼んでいるところですが、問題を作ることによって、もっと学べるのではないかと私たちは思っています。

ゲームというものがどこで手に入るかということと言われるかたがあるので、少しこれをご紹介したいと思うのですが、市販品にも結構あります。ポンペイの火山爆発を題材にしたものや、それから地震のものもあります。

売っているものでもけっこうよく学ぶことができ、これは災害に限らないと思うのですが、多分皆さんは、モノポリーや人生ゲームはされたことがあると思うのです。モノポリーや人生ゲームで、皆さん何を考えられるでしょうか。人生ゲームは結局、人生ルーレットなのだねと思われるかたがあるかもしれませんが、実は人生ゲームはよくよくやってみると、若いときに勤勉に勉強したり経験値をためないと、勝てないような配分になっています。ですので、人生

ゲームというのは、実は若いときにまじめにやるのが大事だねということをおぼくが学んだのです。

モノポリーというのも、やったことがある方は分かると思うのですが、要するに不動産を持っていることがすごく大事だということが分かると思うのです。

このように、一つ一つのゲームは遊びのように思われるかもしれませんが、それを繰り返してやることによって、災害のときは、やはり協力が大事なのだとか、先ほどのクロスロードでいえば、災害がよく来るけれども、そのときそのとき誠実に学ぶこと、考えることが大事なのだねということをおぼくが分かっていただけるといいかと思って作っております。こういうすごろくのようなものや、それから防災駅伝は、防災に関するクイズを解きながら駅伝で、たすきをつなげながらゴールしていくというゲームで、問題作りなども小学生にさせていただいています。

何を考えているのかということなのですが、防災教育の広め方はいろいろあると思いますが、このゲーム型の教材の一番いいところは、作った本人が向うかなくてもできることだと思うのです。

それから、どんなものでもそうですが、知識を持っている人が常に勝つことがないようにしたいと思っています。もちろん勉強は大事ですが、勉強しないとだめだとなってしまうと、勉強そのものの意欲もそがれてしまうので、一生懸命やっても大人とともに負けるし、知識を持っている人は常に勝つことがないように、でも次は勉強したいな、次は私はこうしたいな、次は自分が問題を作りたいなというのが、実は普及のかぎかと思っていて、作っているところです。

学校教育全部がそうだとは言いませんが、私自身も大学で教えていて、やはり講義だとある程度偉そうにしゃべるわけです。残念ながら大学ですと単位を出しますので、先生が教えて、学生がテストの答えを書く形になっています。これに対して、ゲームはそうではなくて、平場で水平的に学べるいい道具だと思っています。自分がゲームを作ってみるとか、次にはそのゲームを使って人に教えに行くということが出来ます。

先ほど小学生の例を出しましたが、小学生がクロスロードをやってみて、次は家に帰ってご両親にこの話をするとか、地域のお友達に話をするとか、そういう教わる人から教える人になる道具だと思っています。幾つか市販品もご紹介

介しましたので、探していただいて、遊ぶだけではないという感じで使っていただければいいかと思います。

(室崎) どうもありがとうございます。では続いて片山さんからお話を伺うのですが、その前にビデオをちょっと流していただきます。

－ビデオ上映－

(片山) 改めまして、池田市鉢塚自主防災隊の片山です。どうぞよろしく願います。

池田市鉢塚自主防災隊の活動

今ご覧いただいたのが教育プログラムの実践ビデオですが、その前に、私どもがこのような席に呼んでいただいたのは、多分ほかの自主防災隊組織と何かが違うから呼んでいただいたと思っています。

まず1点めは、自主防災を設立した目的は、救出よりも普段の活動、広報活動を重要視している点です。私どもは平成11年に設立したのですが、その際、市役所の防災担当官から、結成関係のパンフレットを何冊かいただきました。いずれも『阪神大震災のときに救出された方の8割は、地域の方々の連携なので、そのために地域力を強化する。そのために自主防災組織を作って、救出班や炊き出し班、情報収集班といったいろいろなものを作りましょう』という関係のパンフレットばかりでした。

その形に基づいて設立に向けたのですが、地域の人からの声は、いざという時、年寄りで何ができるのだとか、普段は私たち女性がそんな組織を作っても何もできない、力不足だという声が挙がっています。実際、自主防災組織結成の段階では、絶対に挙がってくる声なので、その辺をどうクリアするかが私たちの問題となりました。

そこで発想を変えて、『いざ災害が起こったときに、どれだけ被害を少なくするか。自分の命が助かるには、普段から何をしていたらいいのか。火事のように、自分の身を守るには、普段どういう心掛けが必要なのか』という、身近な情報を発信するような小さな組織にしよう。気心の知れた小さな組織でまず

作って、その輪を広げていったらどうかと考えました。当時、自治会が主体となって作られる防災組織が多かったのですが、ちょっとマニュアルと違いましたので、池田市の防災担当官といろいろ何回か討議を重ね、うちだけはとりあえずそれでやってみようということで、ゴーサインをもらって設立した次第です。

自治会主体のところが多いのに大丈夫か、うちもこんなのでやっていけるのかと思っていたのですが、池田市の防災講座で、室崎先生に講師として来ていただき、そのとき初めて減災や、自助・共助・公助という言葉などを聞いて、減災という意識に、私たちの目指しているものは間違っていないかという自信を持っている次第です。

もう1点が、大阪中どこでも地元消防団があるのですが、この消防団との連携が私たちの場合はすごく深いということです。毎年行っている防災訓練は、消防職員がもちろん指導するものもあるのですが、私たち自主防災隊員や消防団員が指導することもあり、教えながら自分たちも学んでいこうという姿勢で防災訓練に取り組んでいます。もちろん子供会や婦人会、町内会の方々が参加してくださるのですが、その方たちには一応、全員何かしら時間の許す限り、できるだけ体験してほしいという企画をしています。大体それが私どもの特徴になるのではないかと。私らは普通だと思っているのですが、よその防災の人から見ればちょっと変わっていると言われる点だと思います。

池田市立中学の防災教育プログラム

次に肝心の防災教育プログラムですが、平成17年に渋谷中学の1年生、231名を対象に、総合学習の時間を利用して三日間、計6時間実施しました。1回目ということで、反省事項は多々ありました。いちばんの反省点は、1学年を体育館に集めていろいろなゲームなどを行っているのですが、231名という人数では、やはり時間的な制約もあって、どうしても全員が体験できません。それと中学生特有の恥ずかしさもあり、グループディスカッションにも慣れていません。今日は非常ににぎやかでしたが、中学生でクロスロードをやると、シーンとなった状態なのです。意見のある方と言っても、誰も手を挙げない。目線が合うと、目線をそらしてうつむいてしまう。ちょうど中学生特有の時期だと思っています。そういうことで、生徒間にも意識の温度差があると思います。

先ほど吉川先生のほうから、小学生でもやっていただけますよと言われましたが、むしろグループディスカッション、クロスロードゲーム的なものは、小学生の方が活発な意見ができて、小学校のうちから慣れていくほうがかえっていいのではないかというのが正直な体験です。

そういった反省事項と反対に、煙体験トンネルとか、三角きんをしてそこを通るとか、体験した生徒は、「やってよかった。もしものとき思い出して行動したい」というようにいい評価をいただいているようです。

最後に、教育関係部署の方々にぜひお願いしたいのは、小学校の中学年ぐらいから中学校の3年終了までの、小中一貫した防災教育プログラムを作りたいです。私立などでは、小中一貫教育は脚光を浴びているのですが、市立の小中で、防災教育に関しては、うちの市は一貫してこういう過程で防災教育をしていますよという市が、大阪府内でも出てきていいのではないかと思います。もうすでにやっておられる市があったら、私の勉強不足なので申し訳ないのですが。その辺を、今回特に防災教育プログラム実施をしたあと、強く感じています。

(室崎) どうもありがとうございます。

それでは渥美さん、海外研修の報告も兼ねて、よろしく願いいたします。

(渥美) 海外研修ということで、何人かの方々が、カリフォルニア州、ロサンゼルスとサンフランシスコを訪問されたことが話の中心になります。先に、先ほどの室崎先生のお話の中で、やはり私も知識より意識ということを思いましたので、それをまず最初にお話しし、そこから海外研修に行く意味とそこで見てきたこと、私の目から見て面白かったこと、そして今やっていることを最後に紹介するという流れでいきたいと思います。

意識の伝承について

震災から12年たちました。私も当時は室崎先生と同じ神戸大学に勤めており、西宮に住んでいましたので、大変な目に遭いました。今12年、もう一度亥年が来たから1周したという感じかもしれませんが、そこで伝えたいことがいろいろあります。

その伝えるということでも、三つぐらいあるかと思っていました、一つはやはり命の大切さを伝えるということです。昨日、自宅へ帰りますと、寒中見舞いのはがきが届いていました。このかたは双子のお子様がいらっしゃったかたで、私と同じ年の女性です。双子の子と川の字になって寝ていたのですが、揺れたときに思わず、男か女か分からず、女の子のほうに覆いかぶさって、お母さんの上に柱が落ちてきた。お母さんが覆いかぶさっていなかった男の子は亡くなったわけです。そのあと10年間、彼女は苦しみまして、娘さんも10年たつと11歳になりますから、「私のほうが死んだほうがよかったのか」などと娘に言われると、もう生きていられないと思って、苦しんでこられました。そのお母さんから寒中見舞いが届いて、そこには亡くなった息子さんの写真もありましたし、家族4人の名前、つまり息子さんの名前も書いてありました。12年で一回りだとか勝手なことを言うけれど、全然そんなことがないというのが被災地の現状です。

また最近お話を聞いたのですが、死者の数は6434人としっかり言えます。負傷者の数も言えます。でも、それで障害を負って苦しんでおられる方がいらっしゃる。例えばピアノが頭の上に飛んできた。それで脳に障害をお持ちのまま、意識があるかないかの状態で12年。そのご家族の思いはどうだったかなどと思うと、12年をどうとらえたいか、もう一度考える機会になります。こういう話から、命の大切さを伝えることが大切なことの一つだと思います。

もう一つは、助け合うということは、やはりボランティアが注目されています。ボランティアの技術についてはいろいろあると思いますが、別に技術というよりも、困った人がいたら助けようかという、その助けようかというよりも、ちょっと行ってみようかと思う、そのスピリットを伝えたいというのがあります。

そして三つめは、知恵の伝承です。お隣の石井さんと一緒に、仮設住宅の見守りについて、今、調査研究もやっているのです。例えば見守りのときに、やっていいこと、やるべきでないことなどいろいろテクニク的にあります。そういったものをきちんと伝えていくことも大事ですし、室崎先生のお話にありました「津波でんでんこ」のような、古来言われているような、その地域独特の伝承を伝えることも大事だろうと思います。

海外研修報告

やはり学ぶことをしっかりやらないと、伝えることはできない。学ぶときには、国内であっても海外であってもそれはいいわけです。いいものは学んだらいいということで、この機会をいただいて、阪神・淡路大震災のちょうど1年前の同じ日、94年1月17日に起こったノースリッジ地震を体験したロサンゼルス、それから1906年にサンフランシスコ地震、それから1989年にロマプリエタ地震を味わっているサンフランシスコの2か所を中心に、二つのグループに分かれながら研修に出させていただきました。

行政組織については、ロサンゼルス市の当局、County（郡）それから州知事さんの管轄のState Office（州政府）、がありますが、主に市町村に当たるところへ行かれました。主たるところの災害防災体制は、きちんと行政マンどうしの会話が合ったとお伺いしております。大変意義深い訪問だったと思います。

今日のテーマの防災教育に関しては、例えばロサンゼルスにはCERT（地域緊急対応チーム）というグループがあります。これは市が、一般市民に対して防災あるいはサバイバルの教育をしているものです。それは地域でやればいいのではないかというのですが、ロサンゼルスというのは大都会で隣は誰か分からない、という中で、大阪もそうですが、彼らは合理的です。一人ひとりがある程度勉強しておけば、通勤途中に何かあっても、その人が助けることができるのです。そういうことを願いながら、そしてまたうまく、ここまで勉強したらこのバッジをつけていいよとか、こんな服を着ていいよとモチベートしながら、それを市消防の責任においてトレーニングをされている。こんなことがロサンゼルスで起こっています。またサンフランシスコ、オークランド、サンフランシスコ方面ではSafe Programがあり、地元の企業にも入って、行政と市民と企業とでまちづくりも含めてやっていくというグループがあります。

また、ボランティアというちょっと規模が違いますのですが、赤十字があります。日本は血液とか、病院というイメージがありますが、アメリカ赤十字は救援に来る第一の組織です。何か起こったら、火事が起こったら、それは消防自動車と警察と救急車が来ますが、赤十字も来ます。焼け出された人に食事を配るといったこともやります。そのレッドクロス（赤十字）を訪問されると、意外というか何というか、子供用のかわいらしい教材をいっぱい用意されていて、子供がそれを見て災害のことを学ぶような教室を、NPOである赤十

字がやっておられるということでした。もちろん、これを日本の赤十字も頑張れと言ってしまうのがないわけで、組織が違います。そうではなくて、この辺から盗めるものは、いっぱい盗んでいこうということだろうと思います。

「わがまち再発見」の活動

「わがまち再発見」といって、子供たちと一緒にやるのもあるのですが、「イザ！カエルキャンプ」というものもやっています。今日は、そちらを紹介いたします。カエルはケロケロ鳴く蛙もあります。また、子供たちが、古くなったおもちゃを交換する、替える、替えっこするという意味でもあります。古いおもちゃを持って子供たちがやってきます。今から見ていただくゲームをいろいろとこなしていくと、ポイントがたまって、別のおもちゃと交換できるのです。だから、ケロケロ鳴く「蛙」と、交換する「替える」ですが、それをキャンプにして地域を変化させていこう、変えていこうという意味で、かえる（変える）キャンプといっています。

例えば、かえるの絵が3×3の升目で後ろを向いていまして、子供が水消火器で水をかけます。この水が当たりますと、かえるちゃんがくるっとこっちを向いてくれて、ニコッとしたかえるの絵が出てくるわけです。例えば斜めにかえるがそろうと10点とか、縦にそろうと5点とか、ゲームとして競えるわけです。

防災人形劇というものもあります。しっかり者の娘、おたまちゃん、娘はおたまじゃくしです。おたまちゃんと、それからちょっととぼけたお父さんがえるとが、大阪弁でボケと突っ込みでやるわけです。僕がやっても全然面白くないのでやめますが、学生たちがうまくやります。これで何をやっているかという、例えばしっかり者のおたまちゃんが、「お父ちゃん、水持っていきや。いざいざときには水がいるんやで」と言っているのに、お父ちゃんは水でなくてゆずを持ってくるとか。子供には面白いらしいです。そういう言葉遊びを兼ねながら楽しいものを行っています。

中越地域での学生の活動

幸い大学などという研究機関に置いていただいていますので、毎年いろいろな学生さんと接することがあります。中越の地震が起こったときに、学生さん

と行こうかという話をしたら、行きたいと言ってくれた子が何人かいました。それ以来、延べ何人になったでしょうか、ほぼ毎月、学生さんたちは新潟へ行って来ています。今日も行ってきます。

最初の冬は、学生がポンチョを着て仮設住宅を訪問しました。企業にお世話になり、コーヒーなどをいただきました。バレンタインのプレゼントにチョコレートとコーヒーと一緒にして、被災された方にお配りしたり、お茶わんプロジェクト、絵本プロジェクトもやりました。大学では報告会をして、行きたいと思った全員が行けるわけではないですから、行けない学生たちに報告して、共有していきます。

2度めの冬は、仮設住宅に入っておられる方に足湯をしました。足は素人がもんでもかえってしんどいらしく、実際はあまり足はもまないのです。お話をするだけですが、そのときに「このごろどうなの」と聞いたら、「先週、孫が来て」とか言われます。孫の名前などを聞いておいて、大阪へ帰ったら、その方に向けて個人的な手紙を出します。次に行ったときは、その方はその手紙を持って足湯に来てくださいます。そういう人間関係をじっくりと作っていきます。これは別に教育プログラムとしてやっているわけではないですが、学生たちはきっと何かを学んでくれていると思います。

3度めの冬、今度はもっと集落へ集中するようになってきて、日本自然災害学会にもご支援いただき、小千谷の塩谷集落という、子供さんばかり3人亡くなった集落があります。49軒あった家が20軒に減りました。雪深く、4mぐらい積もるところです。ここで「絆」という言葉をキーワードにまちづくりが始まっています。

田植えも、学生たちとやらせていただいています。阪大生が田植えに入て長靴を履いて入ったのですが、抜けなくなって、集落の人にはだしで行けと言われて行って、長靴だけが残ってしまったこともありました。

私自身も稲刈りをしました。救援復興とかあまりそんな言葉でくくらない、もうちょっと防災教育のもっと根幹の部分で、知識より意識のところの何かになればと、今3年めを続けています。どうもありがとうございました。

(室崎) それでは、今お3人の報告をお聞きになった上での発表を、石井さんからよろしく願います。

(石井) 今日は私は進行表を頂きながら、一体どんな内容になるか量り知れなくて、事前にまとめの資料を用意することは不可能だとあらかじめ会場入り致しました。こちらへうかがってから考えさせていただくということで参りました。今までのお話は、非常に盛りだくさんで、体験もありましたし、評価のお話もありました。切り口も多様だったので、整理することが難しいなあと感じました。一つ一つのお話は非常に充実しているのですが、今後どう活用していくのか、私にも迷いがあります。そこで、今日のテーマ「防災教育の地域の連携を考える」ということから、再確認を進めさせていただきます。

心を感じ取ること

“連携”というキーワードで振り返ると、最初の室崎先生のお話は、「災害時にはたくさんの方がつながることが大切」ということから始まりました。行政職員にせよ市民にせよ、心と技を育む可能性が生まれています。また、今日はクロスロードゲームを体験し、その後のお話をうかがうと、行政職員向けだけでなくさまざまな場面向けの開発が進み、連携へのアプローチがなされているということでした。

唯一私をご用意させて頂いた資料は、本人が審査委員をしている「ぼうさい甲子園」(学校や地域で防災教育に取り組む子供や学生を顕彰 毎日新聞社、兵庫県、ひょうご震災記念21世紀研究機構主催)の骨子です。全国の小中高大学の人たちが取り組んでいるものをエントリーしていただいて、その中から大賞を選んでおり、今年は約120件の応募がありました。その中からグランプリ等、さまざまな賞が選ばれましたので、概要をご紹介します。先ほどお話をお聞きした片山さんや、他のパネラーの方が紹介して下さった事例の中でも、市民の連携についての蓄積を感じていただければと思います。「ぼうさい甲子園」については、私は発表会にも参加しましたので、連携の輪が受賞につながっていると感じています。これからも、いろいろ事例から学ぶ姿勢を大切にしていきたいと願っております。

さらに、蓄積を形にしていくには、継続や情報交流が必要で、このような研修や情報交換の機会の充実を図ることが大事です。数年前、私もマッセ大阪での調査研究事業に参加させていただいて、その結果、片山さんとも出会ったのですが、今日はその後の発展としての海外研修の様子や報告書について確認さ

せていただき、喜んでおります。

さて、地域連携と防災教育をかねあわせて進めていく際、室崎先生は、やはり最終的に大切なのは“心”ではないかとおっしゃいましたが、“心”は非常に見えにくいですね。特に新潟中越地震や阪神・淡路大震災のような、ある程度の規模以上の地震災害の現場に行ったら、“心”を感じ取り合うことが難しくなりがちです。阪神・淡路大震災の被災者は、私たちも含めて文句言いでした。(笑)ですから、対応はされても“心”を感じ取れないのだということを、特に行政の方にぶつけられることがあったように見受けます。実は心では思うことがあっても、結局、具体的に向き合えたという共感体験や、時間をかけて向き合ってくれた人の存在、話し合いに対して逃げ腰ではない人の存在、継続的な関わりによる成果・効果が認識できないと、結果として“心”を感じ取りにくくなることがあります。そういう意味では、防災教育や地域連携を進めるにあたって、留意や工夫が必要であり、“共感する心”をないがしろにすることで、せっかくの取り組みが無駄になることさえ出てくるかも知れません。また、やりたいという声が出てこない原因にもなるでしょう。

具体的なことで向き合う。何か一つのことに絞り込む。クロスロードゲームでも一つのテーマについて徹底的に話し合うルールです。具体的に時間をかけて向き合うことや、話し合いを非常に大事にするゲームです。また、効果や成果を共有して残します。それから楽しさや喜びへの配慮があります。かえるキャラバンの事例でも同じことが確認されたかと思いますが、時間をかけて事柄や共感する心とむきあうことを忘れずにいたいと感じました。

地域防災における四つの課題

それから、私今継続的に長野県松本市での地域防災の試みに関わっています。その体験から見えてきていることに加え、今日のお話を聞きながら思ったことを、4点にまとめてみます。

まず、1点目ですが、部局間連携のしくみづくりの大切さです。特に災害対応を念頭に置くと、行政の部局間連携の仕組みが重要になると思います。例えば、松本市では、職員の参集について、自分の家に近い避難所に行く職員と、本庁に出てくる職員を分けるしくみを検討しており、毎年、年度始めの更新などについて検討されています。そうすると、部局間連携の仕組みがないと、初

期対応に遅れが出るのが予測されます。そこで、地域域防災活動や防災教育を試みとして、地域対応を部局間連携で実施する仕組みを本格的に動かし始めています。その結果をふまえて、官民協働の在り方について、特に災害対応を念頭に置いた仕組み作りについて、明確化を図ろうとしています。

ここにいらっしゃる方は担当部局ではないのかも知れませんが、自治体における地域やNPO・市民との協働推進の取り組みから、部局間連携への課題定期が多数見られるようになっていきます。また、協働推進は平常時の仕組みばかりであり、減災、防災、災害対応を念頭に置いた検討は取り組みが少ない現状です。皆さんが防災や防災教育の担当者であれば、悩ましい状態だと思われます。

2点目は、市民の役割分担の明確化です。防災教育における地域の連携を考えると、地域基盤の強化および意欲・実践の強化は欠かせませんが、前提として、行政、市民、それぞれに役割分担があるのだと思います。災害時においても平常時においても、行政職員は市民の意欲や活動の現状、課題の全貌についての生の声を知る機会が少なく、市民は、行政の仕組み、可能性、限界について、理解する機会が不足しているような気がします。

そのため、地域での対話をはじめると、初期は辛らつな発言が出たり、決裂することもあります。そこを通り越さないと本音での課題解決が始まらないのですが、お互いに気持ちが引いてしまうと、その先へ促すためのコーディネーション・ファシリテーションが上手くいきにくくなります。

3点目は、地域課題を解決するための施策創出への努力です。行政側にも市民側にも不足しているように見受けられます。失礼ですが、行政職員研修の中で、地域課題から施策を作るというワークショップをやっても、地域課題がなかなか挙がらなくて、問題の指摘ばかりという傾向があります。どう変えるのかというヒントについて、今日の事例の中にたくさんの示唆があったと思いました。また、地域課題解決のための話し合いの場を持つ場合、災害はチャンスにできる話題と言えます。立場を超えた話し合いが可能です。なので、最初からうまくいくとは思わないで継続させ、進行についてのノウハウが蓄積されることが望ましいと考えられます。

4点目は、住民自治を促す環境の整備です。行政は標準化と仕組み作りのプロですから、ぜひ担って頂きたいです。求められているのは、前向きに対応す

る意欲や姿勢でしょうか。例えば、災害直後のご遺体の処理について、焼き場の許可が出ないと焼けないということである、行政が基盤のしくみを整えないと、市民は動けないのです。特に災害時は、公平平等のサービスや、誰もが活用しやすいしくみづくりが重要になります。一方、そういう役割を担ってくださっているという認識が市民には低く、また、行政の方も被災者であっても別者的な意識になりがちです。その辺りの説明などは、私どもも一緒にさせて頂く前提をおき、市民が担うべきことは違うことを再度ご理解下さい。市民は共感や個別対応を自発的にやっていく力を、もっともっと高めていくことが求められています。

防災教育では、個別対応を自発的に実施する力の向上を支えるための環境整備が求められます。

終わりに、せっかくなので、今日お帰り際には、グループで一緒にゲームをやったかとは、ぜひ握手をしていただけると幸いです。またチャンスがあったらどこかで会いましょう、何かあれば助け合えますねという声かけで、お願いができればと思います。

先ほども申し上げた協働論の中で、協働とは何かという理解促進に苦しんだ際、よく活用される話題があります。とどのつまりは、夕方5時ぐらいに、「今日どう？」ということからつながっていくのが、協働の始まりではないかという話が、全国どこでもよく出ている共通するネタなのです。そんな感じで飲んだり食べたり語り合ったりするきっかけが、特に行政職員の方同士のネットワークづくりのきっかけが、今日のような研修であれば嬉しいところです。人のつながりはいつかネットワークになり、ノウハウを蓄積へと結ばれ、知恵につながっていくことを、たくさんこの12年間拝見してきました。

では、最後に、阪神淡路大震災以降、市民から生まれてきた知恵やつながりが、防災教育を動かす原動力にもなってきているのではないかと思いますので、そのことを確認する映像をごらんいただき、私のお話を終わりにしたいと思います。

- ビデオ上映 -

ディスカッション

(室崎) お一方ずつ、今日のテーマに関連して、これだけは言っておきたいと思われたことを、一言メッセージとしてみずいただきたいと思います。

(片山) 行政防災担当の方がいらっしゃると思うのですが、今、自主防災組織が各市でどの担当になっているかは、各市によって異なっていると思うのです。危機管理もあれば、まちづくりもあると思うのですが。

今、自主防災組織が一番苦労しているのは、継続していくということなのです。自主防災組織ができたのはいいけれども、どう継続していったらいいかわからないという自主防災組織が非常に多くなっています。一言で言えばマンネリになっています。できたらお願いしたいのが、結成して3年めはこのレベルまで、5年めはこのレベル、10年めはこのレベルと、市としての一貫したビジョンをぜひ作って、私たちに提示していただきたいです。自主防災組織のリーダーたちはマンネリで、今非常にどうやって運営していったらいいのか悩んでいることを、担当者の方はぜひ忘れないでいただきたいと思います。

(吉川) 私はむしろ、今日の室崎先生のお話を伺っていて、自分のスタンスがよく分かったと思っています。今日はゲームというツールを紹介したわけですが、ぜひちょっとでもいいから使ってみていただいたら、分かるかと思うのです。何をやるためにやっているかという、多分、技ではなくて、意識のためにやっているかと思っています。ぜひ使ってください、こういうものだというのが分かっていたら、また「こういうものはないのか」という注文を出していただければいいかと思います。私たち制作者側も、では「これはどう？」という感じで、お答えできると思っています。まずは、お使いくださいというのが一言です。

(渥美) 私は言いたいことを言いましたので、海外研修を受けてきてくださった方で、一言いただければと思いますが、どなたか会場からお願いします。

(会場より) 太子町の斧田です。私は、平成17年度に海外研修に参加しました。ロサンゼルス消防本部に行ったときに、一つだけ理解できるものがありました

た。それは自主防災組織のことに、アメリカの方でもいろいろな研修をやっているけれども、その見本になっているのは、日本からやってくる自主防災というか、今まで綿々と続けられてきた日本の風土を、アメリカは見習っていきたくて聞かせていただいた記憶があります。

やはり今の時代、いろいろな不審者の問題とか、青少年を取り巻くような環境は厳しいのですが、やはりそういう日本の風土を生かしながら取り組んでいただく形のもの、その中でいろいろな楽しみもつかんでいただければありがたいのではないかと。あそこの隊員さんからも共通のいろいろな同じような内容で質問を受けたので、発表させていただきました。どうもありがとうございました。

(室崎) どうもありがとうございました。では石井さん、最後にお願いします。

(石井) テーマに沿ってということで、防災教育と地域の連携を考える場合の主体なのですが、行政側のパートナーとして、片山さんがおっしゃった自主防災組織は非常に重要だと思いますし、子供ということであれば学校が外せません。そしてさまざまな地域の組織、防災ボランティア団体、さまざまなNPO、企業、要援護者対策を考えるならば、パートナーとして社協が外せなくなるのではないかと考えております。

片山さんからのご発言に呼応するかもしれませんが、できればそれらの組織の方たちと一緒に、防災対策や減災活動の長期ビジョンを作ることをお考え下さい。行政だけが作って一方方向の情報を示したら、多分今までと同様、立ち上げはしても動きにくい組織ができたり、活動がマンネリ化しやすくなると考えられます。住民が主体的に考えて、最終的に3年計画を立案、運営・評価できるように促したいものです。少しずつできるようになる可能性は大きいからです。そのための環境を用意する第一歩として、長期計画を一緒に作る。住民自治を推進することを、これは全庁的対策かと思いますが、今こそ手を抜かないで進めて頂きたいと強く願います。

現在、住民の底力があると言われる地域を見に行ったら、時間をかけてやってきたプロセスに感動させられることが多々あります。そこで、目の前の効果ばかり追いかけるのか、それとも10年後の成果のために最初は我慢をするのか、

選択する必要があると感じます。

では、今から始めるのか、すぐに効果が見えないからやめておくのかということ、自治体組織の判断としては厳しいことかもしれませんが、ぜひ取り組んでいただきたいと思います。3年頑張ったら、必ず片山さんのような方を中心とした市民の自治の芽が出てくると信じます。やる気が見えにくくなっている地域では、特に初期の行政の旗振りは重要でしょう。全国の先駆けた地域の情報にアンテナを伸ばし、ぜひ関西、大阪府内からも先進事例が育つよう、ともに歩ませて頂ければと思います。

まとめ

(室崎) 私のまとめをさせていただきます。

今日の全体について私が重要なキーワードというのは、学び合いのスパイラルということだと思うのです。学び合い、伝え合いという、お互いの経験とか体験とか知恵を共有化するにはいろいろな方法があるけれども、みんなでそれを伝え合い、学び合うことによって、ただスパイラルは前に進んでいきます。どんどんステップアップしていったって、日本全体、世界全体が、非常に高い防災意識と防災知識を持つ社会を作り上げていくことがすごく大切です。それは今お座りになっているテーブルの4～5人から始まって、国際的なところまでスパイラルとして広がっていく、そのための方法とか仕組みとかツールをしっかり考えていこうということだったと思うのです。

先ほど海外研修の方が、アメリカも学んでいるという話をされました。ちょっと個人的なことを申し上げると、明日の夜の10時から教育テレビをぜひ見ていただきたいと思います。アメリカが今日本を一生懸命に学んでいる姿が出てきます。そこに出てくるローリー・ジョンソンという、私の阪神大震災以降の友人で、1年間に何度も合って、彼女は一生懸命日本の復興計画を勉強するわけです。今ニューオーリンズで大変な事態の中で、彼女は2000～3000人の市民の前で演説をします。みんなの思いを出しましょうと、みんなの思いを語り合って、そこから希望を見出そうと、大演説をやるのです。ニューオーリンズは今ものすごく大きく変わりつつあるのですが、それは彼女の意見では、神戸というのは聖地で、神戸からいっぱいいろいろなことを学んだと言います。そのテレビ番組の中で、私がこのあと言うのは、今度は日本がニューオーリンズに

学ぶのだ、きっとニューオーリンズは素晴らしい復興の成果を上げるだろう、それを今度は我々が学ばなければいけないということです。本当にそういう仕組みというか関係性をどう強めていくかということは、すごく大切だということが私なりの結論です。

先ほど石井さんは、いろいろ素晴らしい報告を聞いたので、そこまで私は同意見だが、何かよく分からない、混乱しているところと言われるのですが、そんなことはありません。皆さんが、ここがいいなと思ったこと、何か一つでも心に響いたものがあれば、そこをしっかりと受け止めてください。そして、受け止めるだけではなくて、それを皆さんがたの現場とか持ち場とか地域で、一つだけでもいいから実践をしていただければ、それがスパイラル構造の一つの大きな原動力になるだろうと思います。

今日は長時間熱心に参加、あるいは一緒にご意見を出していただきまして、本当にどうもありがとうございます。これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。